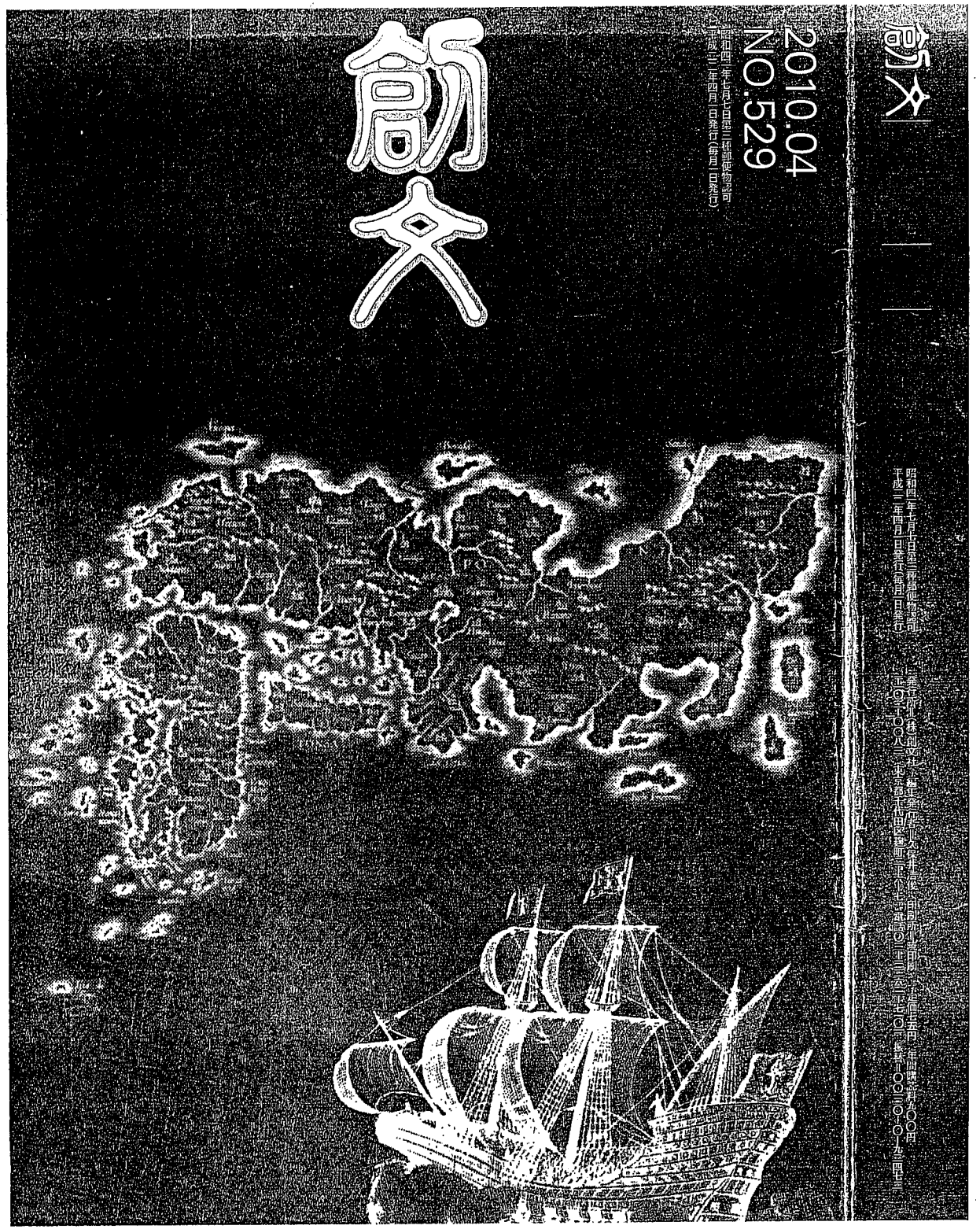


http://www.sobunsha.co.jp　ISSN1343-6147

▷最近の刊行書◁　（価格表示は本体価格）

7月

楠　正弘
仏教信仰と民俗信仰　6500

8月

高柳俊一（長崎純心レクチャーズ）
英文学とキリスト教文学　2200

9月

上倉庸敬
フランス美学　涙の谷を越えて　6000

10月

トマス・アクィナス　稲垣良典訳
神学大全　35／36　5000

11月

芝崎厚士
近代日本の国際関係認識　4500

12月

根占献一
ルネサンス精神への旅　5200

ホウルズワース他　西山敏夫訳
英米法の歴史家たち　3000

1—2月

稲垣良典
人格《ペルソナ》の哲学　3800

ハイデッガー全集58　忽那敬三・池田喬訳
現象学の根本問題　5000

3月

神寧秀夫
中・近世ドイツ都市の統治構造と変質　8900

川添美央子
ホッブズ　人為と自然　5500

阪崎浩二
中欧の模索　5800

4月

川名　洋
イギリス近世都市の「公式」と「非公式」　8000

石井・服部・玉井編　神崎直美担当
大目附問答・町奉行問合挨拶留・公辺御問合　9200

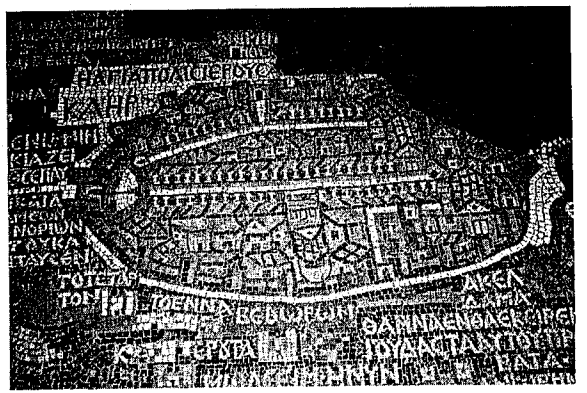
水林　彪
国制と法の歴史理論　12000

二〇一〇年

創文
昭和四一年七月七日第三種郵便物認可
平成二二年四月一日発行（毎月一日発行）
二〇一〇年四月一日発行（毎月一日発行）
2010.04
NO.529

地域を描く

時空の交差点（38）――――――大月　康弘



マダバのモザイク地図（560年頃）から「イェルサレム」部分
出典：commons.wikimedia.org

春野に咲く花が堂内にも広がったかの彩りである。

アンマンから南西に約四〇キロメートル。死海 Νεκρά Θάλασσα, Θάλασσα Αραβά を挟んでイェルサレムとちょうど一対をなす地点にある町マダバ Madaba は、東方からの巡礼路にあって、聖書世界へのいわば入口となった土地柄だ。

この町のスカイタ礼拝堂で思いがけぬ発見があったのは、一八八四年のこと。五六〇年頃の制作と推定される床モザイクは、現存する断片の最大部分で一〇・五×五メートルにもなる大作である。オリジナルは、横二五メートル、縦六メートルもの大きさと想定され、旧約、新約の両聖書に登場する地名が一四〇もギリシャ語で添えられていた。まさに、聖地 loca sancta 巡礼の一大案内図ともいうべき盛観である（発見後に立てられた教会の火災等で破損し、今に残るのは本来の七分の一程度。現在は、聖ゲオルギオス教会が建てられている）。

カルケドン公会議（第四回全地公会議、四五一年）に当地の主教が出席しているから、この町がかなり早い段階から、東に広がるローマ帝国世界において行政上の拠点だったことはまちがいない。その最盛期は六～七世紀とされ、アラブ世界に入ってからもウマイヤ朝下で大いに賑わったという。

床モザイクの残された断片には、ヨルダン渓谷からナイル川までが描かれている。中ほどにイェルサレムが配置され、聖墳墓教会はじめ、聖都所在の五つの聖堂の名が刻まれた。東方の砂漠からエジプトのデルタ地帯までを一望するパノラマには、ティール、シドンといった地中海沿岸都市の名も見える。

発見当初は、マリア終焉の地エフェソスやスミルナまでもこの地図に含まれたというから（辻佐保子『古典世界からキリスト教世界へ』）、さながら東地中海域の聖蹟地図の趣だったというべきだろうか。

地中海の周辺には、彩り豊かな舗床モザイクが数多く残された。富裕な市民の屋敷や商業施設。都市生活の拠点ともなったキリスト教の聖堂。これらの建築物の床を飾ったモザイクが、地域や世界の相貌を教える海図ともなっていたのである。マダバのモザイク地図は、聖蹟と信仰が織りなした歴史を伝えて、集う人びとの明日への足取りを導いたのだった。

（一橋大学教授・経済史）

初期フライブルク期のハイデガー哲学

――一九一九／二〇年冬学期講義『現象学の根本問題』を読む――

池田　喬

一

二〇世紀の哲学界に圧倒的影響を与えたハイデガーの主著『存在と時間』（一九二七年）は、目下、次々に現れる新資料の研究を通じて、新たな姿を現しつつある。特に、『存在と時間』に続く第二の主著と呼ばれる『哲学への寄与論稿』のドイツ語版原著が一九八九年に出版され、『存在と時間』「以後」から『存在と時間』があらためて照射される一方、同じく一九八九年に『ディルタイ年鑑』誌上ではじめて公にされ、『存在と時間』の当初の構想を思わぬ仕方で明らかにした一九二二年の通称「ナトルプ報告」が話題を集めている。『存在と時間』の古典的解釈は、この書の成立の「以前」からも「以後」からも根本的に見直しを迫られているのである。

長らく未公刊であった二つの貴重資料の登場がハイデガー研究に及ぼした影響については、いくつかの良心的な解説書によって一般読者にも近づきやすくなっている。[1] しかし、ハイデガー研究の現場からすると、この二つの資料の登場はせいぜい氷山の一角にすぎない。ハイデガーの死後、刊行が開始された独クロスターマン社のハイデガー全集、そして

【創文】529号／二〇一〇・四

●時空の交差点　38
地域を描く　大月　康弘
初期フライブルク期のハイデガー哲学
―一九一九年／二〇年冬学期講義『現象学の根本問題』を読む―　池田　喬　1
主権国家再訪
―地球規模の公共圏と地球的統治の展望―　郭　舜　6
ネット課金を模索するアメリカの新聞社　茂木　崇　11
昨今政党政治遠望　山田　央子　15
討究の旅
―新著『ルネサンス精神への旅』寸描―　根占　献一　19
『リヴァイアサン』の光と闇
―『ホッブズ　人為と自然』によせて―　川添美央子　23
出版案内
〔表　紙〕　串田　光弘

れない「無限委任」すなわち「代表」であることによってのみ、その前提が担保されるのであった。

こうした議論の文脈を踏まえるならば、先に紹介した福沢と兆民との掲げた目標が長い間その同時的実現をみなかったとしても、その背景には、近代日本政治に特有の制約が働いていたというだけでは済まされない、大きな問題の伏在が明らかとなろう。だとすれば、今日の「政権交代」をめざす二大政党制と「マニフェスト」が、ともにイギリス政治をモデルとして採られたものであるにせよ、そこには相容れない側面があることを認識しておく必要もあるであろう。問題となるのは、「マニフェスト」あるいは選挙の争点を形成した「選挙公約」によって政権についた側が、その意味では、有権者からの「有限委任」であるにもかかわらず、政権交代後、「代表」として、一切の事項を自由に決定していくことである。「代理」か「代表」かは、今日、ルソーやバジョットのように、オルタナティヴに決することはできないであろう。中心的な政党の政策が近似しつつあるなかで、「マニフェスト」は有権者にとってなくてはならない判断材料であるが、しかし政治の抱える問題の広さと複雑さを考えれば、代議士にはそうした「代理」性をこえた「代表」機能があることも否定できない。「代理」と「代表」の問題には、必ずやこうしたジレンマが存在し続けているのである。

解決策があるわけではない。ここでは、再び兆民と福沢に戻って幾ばくかの示唆を引き出してみたい。「有限委任」を説いた兆民は、選挙人に対し常に「政治綱要」を講究すること、言い換えれば政治的事項への絶えざる関心とそれをめぐる討議・討論を要請していた。「マニフェスト」を充実したものにさせるのも、その内容を吟味し、またその実現を監視し、ときにはそこからの転換を認めていくことも、それらを意味あるものにするためには、選挙人の側の不断の政治的関与が不可欠なのである。他方、議院内閣制下の議会に求められていたのは、福沢のいう「異説抗論の戦場」、バジョットが「偉大な討論の場」と表現した機能である。バジョットは議会という場での「公開」の討論が社会に深甚な影響を与えることを「国民を教育する」機能として、議院内閣制の重要な機能の一つに位置づけていた。政党が議会という「天下の顕場」において政権を争うところに、隠された情報や問題は初めて顕在化し、国民は考えるべき課題を認識することができるのである。そうであればこそ重視されるのが、バジョットによって「議院内閣制の所産」とされた「批判する野党」、福沢があえて「非政府党」と造語した存在である。議会における議論を活性化させるのは与党のみにできることではなく、明日の政権をめざす野党の任務もきわめて重い。「代理」「代表」問題はジレンマであり続けるであろうが、「代理」「代表」それぞれに託された課題を認識し、それを果たそうと力を尽くすことによって、ジレンマであることの意味を逆にポジティヴに転ずることも可能なのかもしれない。

（やまだ・えいこ　青山学院大学法学部教授／日本政治思想史）

討究の旅

――新著『ルネサンス精神への旅』寸描――

根占　献一

今回の新たな著書『ルネサンス精神への旅――ジョアッキーノ・ダ・フィオーレからカッシーラーまで』は、題名の説明から入ったほうがよいであろう。今もルネサンスの時代を踏査していることを意図したく、最初は「ルネサンス精神を旅する」という書名を考えていた。ただ、日本語としての安定感を考慮し、出版社に原稿を渡す段階で現在の名に改めた。

「旅」のままであれ、動的な「旅する」であれ、やや軽い響きがあるかも知れない。随想風に聞こえるかも知れない。意識的にこの傾向を表そうとしたわけではないが、拙文中で実際に自らの旅行に触れていることも確かであり、こちらも表現したい気があった。思惟の精神的旅のみならず、現実の身体的な旅行も言いたかったのである。ある意味で苦労したのは、横文字のタイトルであった。いくらかでもイタリアにいる知人やアルファベット圏の外国人に内容を推測してもらいたく、前回の創文社刊行書同様にイタリア語による目次を付けた。これがドイツ語なら、アクザティーフ（対格）を使うことで「（精神）への（旅）」をうまく表現できよう。イタリア語では「（精神）における（旅）」と勘違いされないか、と心配が残った。私としては、自らがルネサンスという時代の精神、空気に触れようとする旅であることを表現したいのであり、私自身が長年取り組んできた結果、体に染み付いてしまったルネサンス的感覚での旅、というようなことではない。

さて、この探訪に、いつの間にかたいへんな時間と労力を掛けていたことになる。そして、成稿してみると、不思議なことに、本文のいろいろな人物たちの旅路にもかなり言及しているではないか。思い出すままに挙げると、リチャード獅子心王のシチリア行、コーラ・ディ・リエンツォのアヴィニョン行、ルーカ・シニョレッリの、システィーナ礼拝堂壁画に関わるローマ行には触れていないものの、モンテ・オリヴェート・マッジョーレやオルヴィエートでのフレスコ画制作行、映画に見る英国女性のフィレンツェ行、ルドルフ・アグリコラやゲーテ、和辻哲郎のイタリア行、グレゴリオ・ダ

ーティのバレンシア行、小松帯刀の江戸行、芥川龍之介の京都・長崎行、ビーコやメディチ一族のローマ行、ラス・カサスやカッシーラーのアメリカ行等々。その旅の様子が点描に留まるものであったにしろ、旅という文字を使うことは適切であったのではあるまいか。

次に、副題「ジョアッキーノ・ダ・フィオーレからカッシーラーまで」について。エルンスト・カッシーラーの思考法はジョアッキーノ・ダ・フィオーレ（フィオーレのヨアキム）の神秘主義と大きく異なっているので、現代に移行するにつれ、合理精神が高次化することを表しているように取られるかも知れない。これは単純に拙著が扱った時間幅、ルネサンス精神の幅広さの謂いと受けとめていただきたい。場合によっては、カッシーラーでなく、ゲーテとしてもよかったかも知れない。そのほうがジョアッキーノと結びつく面があっただろうか。神秘家ゲーテと言えなくもないからである。そのようなゲーテをカッシーラーがこよなく愛読していた、と喋々と弁じたてるには及ぶまい。亡命とは言え、彼の旅とともに、「一三五冊からなるヴァイマル版のゲーテ全集は、（略）最後はアメリカ合衆国にまで渡」（本書一六六頁）ることになる。

「緒言」と「あとがき」では、本書の背景と構成を述べた。特に「緒言」では『オギュスタン・ルノデ特集号』（一九五二年）に言及した。この号には、六年後には浩瀚なフィチーノ伝を刊行するレーモン・マルセルの論文を始め、重要な論が目白押しで、研究の過程において影響を受けた論考が多い。ルノデ紹介の労を取っているのは、リュシアン・フェーヴルである。「あとがき」では、フランチェスコ・パトリツィの名を出すことができた。イタリア・ルネサンスの哲学者であるが、現国名ならクロアチア出身者となろう。この地はイタリア半島、特にヴェネツィア共和国との縁が深かった。ユマニスムと宗教改革を考究したルノデも、熱烈なプラトン哲学者で多様な論題に挑んだパトリツィも、今後の私の研究方途にいる。

頁数の割には章が多く、十一章に亙っている。全般的に章が短いことに他ならないにしても、八百年に垂んとする中、ルネサンスの多様性が感じられれば、と願う。いささか、それぞれの章の狙いどころを取り上げ、この場を借りて補足や訂正を行なってみよう。

「第一章　ジョアッキーノ・ダ・フィオーレとコーラ・ディ・リエンツォ　第一節　ルネサンスの起源」は、本書にあっては序説に相当しよう。時代区分上、ルネサンスと宗教改革を近代の始まりとする場合、この両者の関係はどのように捉えられるだろうか。他の幾つかの章でも、この問題には間接的に言及している。本文に書いたように、この章全体はラッファエッロ・モルゲンの歴史観に影響されている。ジョアッキーノ主義者コーラの政治的・宗教的夢は破れ、あとは文化的夢がルネサンスとして残ったと結んでいる。コーラの歴史的重要性を強調したのは、ルネサンスと宗教改革の起源の同一性を、これらの同根性を主張したコンラート・ブールダッハであった。果たして、コーラが文学のダンテやペトラルカとともに、ルネサンスの先駆者と位置づけられるほどの影響を、後世のイタリア社会に与えたかについては疑義をはさむ研究者もいる。

コーラ関連の邦語文献は挙げなかったものの、わが国の西洋研究の揺籃期に大類伸博士などに貴重な論文があることを想起したい。これは、「ルネサンス概念」をめぐる論争が一世を風靡した時代の反映と見られる。イタリア・ルネサンスの開始がどこにあって中世にどのような終りを告げたのか、またそのルネサンスの本質は何であったのか、さらにはこのルネサンスもいつ終りを迎えるのか、という論点は現在の日本では殆ど関心が払われていない。これに対し、イタリアなど欧米では異なった状況にある。ブールダッハなど、少なからぬ研究者がこれらの論題に取り組み、古典となる著作を残した。この史学問題に関わる幾編かの論文を物し、この方面でも注目に値する現代の思想史家はチェーザレ・ヴァゾーリである。[1]

次の「第二章　ルーカ・シニョレッリの反キリスト」も、特に絵画上の終末論テーマを扱っている。これは元来、英語で書かれた専門書（イタリア語訳版も同じ年に刊行）の書評であった。先述の『オギュスタン・ルノデ特集号』収載のアンドレ・シャステルの論考も、ここには登場する。「第三章　ラウデージのコンパニーア」も、終末論的風潮の中でコンパニーア（信心会）の生起に言及し、音楽問題等を取り上げている。これら三章が「第一部　キリスト教と世界」をなす。

この第一部を受ける形で、第二部の最初の章、通し番号では第四章になる「ペトラルカとフィチーノにおける聖アウグスティヌス」が来る。ここではキリスト教と異教の関係を考察し、ルネサンスを機にその関係が大きく変わるのではないか、ということを指摘した。[2] そして、第二部全体は「社会とヒューマニズム文化の諸相」であり、この章に続いて、「第五章　フマニタス研究とアグリコラ」、「第六章　パラゴーネと科学的方法論」、「第七章　日記・伝記・系譜」と続く。この部全体でヒューマニズム（人文主義）とは何であり、それがどのように、現実社会に現われるかを見ようとした。第五章はイタリアとともに、フランスやドイツのヒューマニズムに注目した。その中で、キケロやウェルギリウスの、つまりヒューマニズム文化の中心人物の故地であるイタリアに対し、特にツェルティスの反応は愛国的で興味深い。この史的文脈で、文化に関する対伊感情では、ベルギー出身のヒューマニスト、クリストフ・ドゥ・ロングイユを紹介するのも一興だったかも知れない。両人とも旧跡の地で苦汁をなめる。関連する注では、幾らか女性ヒューマニストに触れようと試みた。これは近年のルネサンス研究の大いなる成果であるので、その一端を明らかにしたかった。[3]

この部の最後は系譜を扱い、メディチ家などに言及している。[4] 次の、最後の「第三部　ルネサンスと近代」の最初の章、通しでは「第八章　近世ヨーロッパとメディチ家」ではこれを受け継ぎ、メディチ一族と時代動向を詳述した。系譜といえば、「第九章　ジョヴァンニ・ビーコの『演説』考」では、やはり同族であるジュリアーノ・ディ・マリオット・デ・メディチに嫁した一女性とビーコの関係が、この論考の発端になっている。[5] 題名の『演説』は通常『人間の尊厳についての演説』であり、ゲーテの作品で知られるファウストのような人間の理想類型が謳われているとされる。このこと

は、「第十章　ゲーテとイタリア・ルネサンス」で言及した。ゲーテは、先述したルネサンスと宗教改革の関連については対立的に捉えず、これらがともに近代化に関わり、自分の時代まで三百年が経過したという時代認識の持ち主であった。

ゲーテとルネサンスを扱った論文は珍しくない。もしも小論に独自性があるとすれば、フィチーノの視点からの箇所、『タッソー』中のアントニオのある言がフィチーノ書簡の一節を髣髴とさせると指摘したところであろう。このアントニオがタッソーの同時代人であり、フィチーノの同時代人でないことは確かである。しかしゲーテは他の場合同様に、複数のアントニオを利用した可能性が高い。それは、ゲーテが引用したラファエッロの言に示されるように、彼の基本的思考法に一致するからである。最後の「第十一章　カッシーラーの思想とルネサンス観」は、先の三百年を思想史家がどのように捉えたかを略述し、イタリア・ルネサンスの史的意義と役割に一考を加えてみた。

本書の巻頭言に、アウグスティヌス『三位一体論』の一節をラテン語のままに載せている。ここでは中沢宣夫訳を引く。「そこで、いかなる研究心の旺盛な人も、いかなる好奇心の強い人も、知らないことを熱烈な欲求によって知ろうと切に求めるときでも、知らないものを愛するのではない。なぜなら、彼は愛するものをすでに類的に知っており、かつそれを、まだ知られていないが、おそらくその価値が賞賛されている或る個物、または個々の事物においても知ろうと欲し、自分を愛へ駆り立てる想像的なかたちを心で描くからである。」これはカッシーラーの心のうちを示していまいか。ゲーテなら「予感」と表現したものであろう。それはまた筆者の心境であり、彼が知ろうと努めたものは結局これであった。

(1) その一点を掲げると、Cesare Vasoli, Due momenti della discussione sul Rinascimento, in *Rinascimento, mito e concetto*, a cura di Renzo Ragghianti e Alessandro Savorelli, Pisa 2005, 213-54.

(2) 四四頁中ほどの表現は誤解を与えかねない。無論、プラトンはキケロよりまえの人である。

(3) 英語圏では女性著作家たちが収録された、次のシリーズは画期的。The Other Voice in Early Modern Europe. A Series Edited by Margaret L. King and Albert Rabil, Jr.

(4) 系譜に関わる一〇一頁の治歴は勿論「治暦」の誤植である。

(5) ジュリアーノのロレンツォあて書簡については、*Pico, Poliziano e l'Umanesimo di fine Quattrocento*. Catalogo a cura di Paolo Viti, Firenze 1994, 61-2, Fig.6. またこの体験の精神的衝撃は、*Ibid.*, 139-141. なお、本章一二七頁、亡父は「亡夫」の変換ミスである。

(ねじめ・けんいち　学習院女子大学国際文化交流学部教授／ルネサンス思想・文化史)

■根占献一『フィレンツェ共和国のヒューマニスト
—イタリア・ルネサンス研究—』　六五〇〇円
■根占献一『共和国のプラトン的世界
—イタリア・ルネサンス研究・続—』　五三〇〇円
■根占献一『ルネサンス精神への旅—ジョアッキーノ・ダ・フィオーレからカッシーラーまで—』　五二〇〇円

『リヴァイアサン』の光と闇

——『ホッブズ　人為と自然』によせて——

川添　美央子

『リヴァイアサン』の名はしばしば、陰鬱な雰囲気とともに想起される。確かに、イングランドの内戦を背景に書かれたという事情、人間相互の不信を前提とした万人の戦いを描いているさまなどが、凄惨な様相を呈しているのは否めない。しかし、それが数世紀にわたって政治をめぐる思考を刺激し続けてきたのは、『リヴァイアサン』が単に人間のエゴイズムがもたらす悲惨さを描いたばかりでなく、未来に向けて新しい地平を開こうとする強烈な意志に満ちあふれ、発展される余地を十分に残した斬新な理論を提示しているからでもある。

ある思想家の魅力とはこのように、己の内部に相反する側面を共存させ、自らが抱えた不調和に耐えつつ、それを創造的に開花させるエネルギーのうちに見出すことができる。特に、ある思想家が応えようとする課題が多いほど、しかもそれらの課題が容易に調和しえない関係であるほど、そこから生まれる著作はおのずと複雑な色合いを呈し、それが作品に独特の陰影と光彩とを添えることになる。拙著『ホッブズ　人為と自然』では、ホッブズが応えようとした複数の課題と、そこから帰結する彼の思想の多様な側面を、いくつかの自然概念を析出してゆくという形で明らかにした。ここでは拙著の内容を要約することは避け、著書において考察したホッブズの思想の多様な相貌という問題に、別の角度から接近してみたい。すなわち、著書で扱った『自由と必然』『自由・必然・偶然に関する諸問題』(以下『諸問題』と略記)などの自由意志論争文書と、『物体論』という哲学的著作の持つ雰囲気や方向性の違いを明らかにし、それらの違いを考慮に入れた上で、あらためて『リヴァイアサン』という作品の性格について考えてみたい。

『リヴァイアサン』『物体論』『諸問題』は、いずれも一六五〇年代に次々と出版されている。『諸問題』の端緒となった自由意志論争は一六四六年に始まり、他の二著作も一六四〇年代に執筆が進められていたり構想が練られたりしていたため、これらはほぼ同時期のホッブズの思考を映し出した作品だといえよう。しかしながら